

シトー会修道院と地域権力

—— トリーア大司教区におけるヒンメロート修道院と「紛争解決」——

矢野夏樹

はじめに

修道制改革を志し全ヨーロッパに拡大していったシトー会修道院はいかにして新しい地域に適応していくことができたのだろうか。個々の修道院に残された証書史料等に目を向けてみると、彼らはその拡大に伴って周辺社会との様々な「摩擦」を抱えていたことが分かる。そのような困難を伴いながらも修道士たちは周辺社会との交流の中で求められた役割を的確に果たし、個々の地域における「人的・社会的結合」を作り出すことで、新しい地域で存在感を高めていった。

本論文で対象としたのは、12世紀前半に現在のドイツのトリーア近郊の森林地域に設立されたシトー会のヒンメロート修道院である。この修道院の社会的発展と、設立者であり第一の庇護者であったトリーア大司教の政治的な関心は切り離せない関係にある。本論文では、ヒンメロート修道院と地域の権力者たるトリーア大司教の間で築かれた関係とその変化に注目し、ハインリヒ・バイヤーらの『中部ライン地方証書集』等に収められた証書史料を主に参照しながら、その背景にある当時の地域の人的・社会的結合のあり方を明らかにした。

1. 研究史と問題の所在

近年の研究では、シトー会修道院が周辺社会との間で築き上げた多様な関係性、同時代の社会の中で果たした役割に注目するような研究動向が中心となっている。このような流れの中で地域史的な関心がより一層強まり、「シトー会修道院と地域権力」という問題がいま改めて取り沙汰されている。この問題はこれまで、国制史的に権力者の側に視点を置く立場と、社会経済史的に修道院の側に視点を置く立場の両側面から研究されてきた。筆者はここに研究史上の課題があると考え。すなわち、従来の研究では修道院と地域権力の関係の重要性は指摘されながらも、修道院と権力者という本来全く異なったレベルの関心事を持つ主体を対象として扱う制約からか、両者の置かれた地域の政治的・社会的状況を包括して説明できる視点が欠如していたのである。

この両者を結びつけるのが、近年西洋史全体で共通した問題として注目されている「紛争解決とコミュニケーション」という視角である。フレドリック・L・チェイエットとステイブ・D・ホワイトは紛争解決行為を「地域の社会的な結合」とその変化との関連において考察したという点で後の紛争解決研究に極めて重要な影響を与えた。今や紛争解決行為を「地域の人的・社会的結合を生み出すコミュニケーション」と捉える点で、諸家の見解は一致している。そしてゲルト・アルトホーフや服部良久によって、この紛争解決という問題は、帝国のレベルから村落共同体のレベルに至るまで、西欧中世世界を架橋する重要な問題であることが示された。

トリーアという地域を題材にして、紛争解決に際するコミュニケーションの形式・プロセスの変化を

明らかにすることは、そこに反映されているトリーア大司教やヒンメロート修道院をとりまく人的・社会的結合のあり方とその変化を明らかにすることに繋がる。したがって以下の章は、この「紛争解決の形式とプロセスの変化」およびそれを生み出した「地域の社会的状況の変化」を検討することを目的としている。

2. トリーア大司教領の政治的混乱と「修道院改革」

トリーア大司教アルベロ（位1132年 - 1152年）の時期から始まるとされる大司教の「領邦政策」は、12世紀から13世紀にかけての多くの紛争や政治的混乱によって必ずしも直線的に発展したわけではなかった。大司教の抱えた紛争やその解決のあり方の変化に伴って、彼らの領邦政策における関心は徐々に推移していった。

大司教アルベロからアルノルト1世（位1169年 - 1183年）までの12世紀半ばの大司教たちにとって重要であったのは、11世紀から続く叙任権闘争によって起こっていた大司教領の政治的混乱を治めることであった。当時「フォークタイ（修道院保護権、およびそれに付随する裁判権）」を通じて、大司教領に自身の支配権の楔を打ち込んでいた世俗諸侯に対抗するため、大司教たちは「修道院政策」を打ち出す必要に駆られた。この文脈において、大司教アルベロは改革派として名高いシト一会士たちを大司教区に招き、ヒンメロート修道院を設立したのである。

加えてヒンメロートの修道士たちは大司教の宮廷において「証人」としての役割を的確に果たすことで大司教との関係を維持することができた。当時は証人＝仲裁者の数が多ければ多いほど、また彼らが紛争の当事者と関係の深い人物であればあるほど、紛争を解決し和解に至らしめる「人的な結合」が強かったことを示していた。したがって未だ強力な裁判権を持たない大司教は、地域の問題の「調停者」として振る舞いたければ、証人たちと密接な関係を結ばなくてはならなかった。

ヒンメロート修道院の果たしていたこの「改革派修道院」および「証人」としての役割が後退するのはトリーア大司教のシスマ（1183年 - 1189年）以降のことである。ヨハン1世（位1190年 - 1212年）以降、シスマとそれに伴う政治的混乱を経験した大司教たちの関心は、徐々に大司教領邦を防衛するための「城塞政策」に移行していく。このように政策の軍事的な側面および城塞都市の整備が意識されるようになるにしたがって、大司教は従来の修道院よりもドイツ騎士修道会や托鉢修道会を奨励し始めるようになった。また、テオデリヒ2世（位1212年 - 1242年）の時代、大司教の上級裁判権獲得の政策も大きな進展を見せる。1220年のフリードリヒ2世の「教会諸侯との協約」により、大司教は自身の領邦の問題について、国王と同等の裁判権を行使できるようになった。ここでは証人たちが人的結合に基づいて行う「仲裁」ではなく、法的な規範に従った「裁判」が行われるようになる。もちろん、この時期は大司教が後期中世にかけて領邦高権を獲得する過渡期にすぎないが、少なくとも今まで修道院が担っていた「証人」の役割は相対的に低下する。

大司教の関心の中心が修道院政策から城塞政策に移るにしたがって、また大司教の法廷の制度的発展にしたがって、このように大司教とヒンメロート修道院の関係が変化してきた。このような社会的状況の変化は大司教からヒンメロート修道院が受け取った証書の形式や内容に注目することでより多角的に検証することができる。

3. ヒンメルロート修道院の所領の拡大にともなう周辺社会との摩擦

12世紀後半から13世紀にかけて、ヒンメルロート修道院は聖俗の様々な主体からの寄進を受けて所領を拡大していった。彼らは所領におけるフォークトの権利（慣習的な貢租）や森林の用益権を巡り、周辺の領主や村落共同体との間に様々な紛争を抱えていた。

修道院設立当初、周辺社会との摩擦はトリーア大司教からの保護を得ることで解消することができた。大司教は多くの場合、12世紀の西欧社会で支配的な「和解と仲裁の儀礼」の通例に従って、当事者たちと関係の深い「証人」を巻き込みながら、修道院と紛争相手の「双方の取り分」を保つ形で両者の権利を保証した。

しかしシスマの時期以降、このような大司教の調停があてにできなくなると、ヒンメルロート修道院は皇帝やシュパイヤー司教等の大司教以外の調停者を求めるようになる。このことは修道院所領がトリーア大司教区の外へ拡大したということにも起因するが、いずれにせよ社会経済的な事情や大司教との関係の変化に応じて、紛争を解決するための新たな人的・社会的結合を修道士たちは求めたのだ。

13世紀になると、従来の和解と仲裁の儀礼とは明らかに異なる「公的な裁判」という紛争解決の形式が登場する。1206年頃にヒンメルロート修道院がイーゼンブルクのレイムボルトと争った際には、レイムボルトによって大司教の法廷からドイツ国王の法廷へと「上訴」が行われている。その裁判では国王が大司教に証人の「聴取」を行うことが命じられていることから、証言の客観的な内容にしたがって判決が下されようとしていたことが分かる。このように、大司教や諸侯が「ドイツ国王の法廷」とのつながりを持っていたことはトリーアの司教区に「公的な裁判」が導入される一つの原動力となっただろう。また、1226年にヒンメルロート修道院とザンクト・ジメオン教会が3つの村落共同体と争った際には、実際に「司教区裁判所首席判事 (archiepiscopi officialis)」であるテオデリヒという人物によって「判決が下され (sententialiter diffinimus, ...)」している。もちろんこのような決定的なニュアンスを含む「判決」が下されたとしても、最終的に紛争が解決されるためにはその判決を実行しうる「人的な結合」が必要とされたことは依然として変わらなかった。今挙げた2つの事例でも、当事者間を仲裁する大司教や小教区司祭がそれぞれ登場し、最終的な和解に至ることができたのだと推察される。この「公的な裁判」と従来の「和解と仲裁の儀礼」が併存している状況が、13世紀半ばまでの特徴である。

おわりに

ヒンメルロート修道院に関する史料を見る中で、「和解と仲裁の儀礼」が未だ一般的であった社会において、大司教の宮廷で「公的な裁判」が発達していく過程における特徴的な「手続きの形式上の変化」が浮かび上がってきた。ヒンメルロートの修道士たちがこの変化に応じて、その都度必要な紛争解決の形式を選択することができたのは、ひとえに「大司教との密接な関係」に代表されるような人的・社会的結合を構築しようとした努力があったからこそである。社会的状況の変化の中で周辺社会の中における自らのあり方を絶えず模索していく姿勢に、ヒンメルロート修道院がトリーアという地域に適応することができた最大の理由を見てとることができる。